

ユーモアと創造性の「City」の中の下町
 —ミニ独立村「こんべいとうハウス・天気村」への招待—
 山田 貴子
 (天気村村長)

子供や主婦たちのためのミニ独立村「こんべいとうハウス・天気村」
 草津市東草津一丁目IIを紹介するには、それを始めた私という人間を語らなくてはなりません。小さい時から運動好きだった私は、大学時代までスポーツ（バスケットボール）の世界にぞっこん入っていました。単純、無邪気な私にはスポーツの世界があっていたようです。勝って喜ぶ顔、負けて泣く顔も好きでたまらない。流れ落ちる汗や涙にははかりしれない輝きがある。涙を流す時、アア生きているなあ、って思ったものです。スタンド下の暗いゲートからパッとまばゆいコート上に立った時、喜びにふるえたものでした。スポーツを通していろんなことを学び、それは私の身体の一部として今

日まで生き続けているようです。それが何なのかは本当に語りつくせないくらいの多さで。結局は人間っておもしろい。ふれあいって暖かく、いつまでも私の人生には切りはなせないものだ、という結論に達してしまふ。

そんな私が目指したのは体育の教師になることでした。限りなく何かをみつめる子供達の目の輝き、感性のするどさ。そしてふれあいの中で自分自身も感性を失うことなく、一生懸命生きていけたらと思ったからです。ところが念願の中学教師となり子供達とふれあっているうち、目の輝きのない子の多いこと。感動すること、喜怒哀楽もない、ボールで言えば地に投げかけてもはずんではないような、そんな子の多いこと。一つのことをやる時、やるのはやるんだけど、要領よく手つとりばや、そして合理的にという感じで、その行動に魂というか、根性というか、心が全然入っていない。私の目には一人一人の個性が見えてこない。みんな平均して見えるだけで、みかんで言えばLかMかSかみたいな規格品に見えてしかたがありません

天気村のマーク



ん。これでいいのだろうか、こんなもんなんだろうかと、そして妥協して生きていっていいのだろうかと深く考え、悩んだ時がありました。いま考えてみると、短い教師生活で出逢った子供達は、ただ単に私の前をスーッと冷たく通りすぎていったにすぎません。時がすぎれば「先生、ありがとうございました」。ハイ、チョンノ、というそれだけのふれあいでもいいのだろうか。個性がなく、印象もなく...

人が輝いて見える
 時
 人間って誰でも、こんべいとうの一つの突起のようになことやってみてみたいなあ、知りたいなあ、知りたいたちとび出して

いるはず。その欲望実現のために限りあるエネルギーをつぎこんで失敗したり、またたちがってトライしたり。それをくり返しながら実現へと近づいていく。その過程はさかなくカッコ悪いけど、その時、頑張っている時に人は輝いて見えます。もともとと小さな赤ちゃんー幼児期からこの欲望の芽を見守ってやり、助けてやりたりして育てていきたい。個性を明確に伸ばしてやりたい。この気持ちを全力投球できる場があれば...

その思いは単に幼児だけでなく、子供も大人もお年寄りにもと極端に飛躍してしまい、ここに天気村が誕生しました。

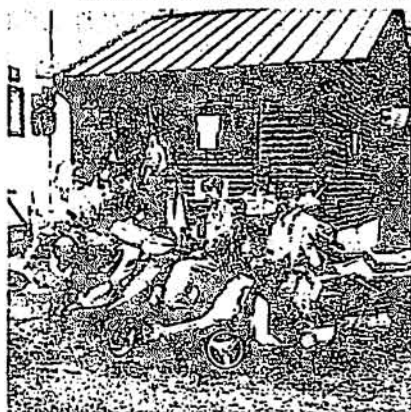
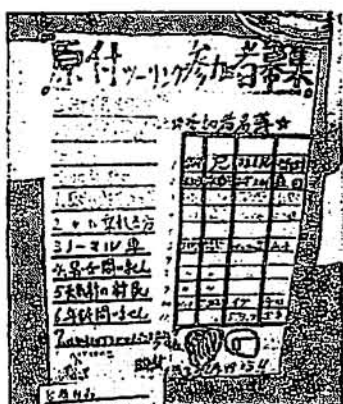
× × ×
 天気村は、ふれあいの場です。カッコよくもなんともない庶民の場です。私は本を読むのが好きですが、とりわけ山本周五郎の下町の人情物とか、八つっあん・熊さんの落語の世界が好きです。人生の悲哀がほのほのと伝わってき、また庶民のたくましいユーモアと創造力が実感できるからだと思います。夏目漱石の草枕だったかに、「知に働けば角がたつ。情に掉させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかくこの世は住みにくい」といった有名な言葉がありますが、漱石にして住みにくいと云わしめたこの人の世です。とにかく何か私達の人生に潤いを与えてくれなくてはいいけない。その何かがあ

を連帯

る人には愛であり、またある人には友情かもしれない。それが私の場合にはユーモアと創造力であるということです。何もかもがすぎずし打算で成り立つ世の中で、それらは少しでも生きることにくらみを与えてくれるものだ、という気がします。

従って天気村とはユーモアと創造性の上になりたった、個性を生かす庶民的なふれあいカルチャーの場、と言った長ったらしい、いかにもしろうとっぽい説明のつくCityの中の下町なのです。この辺の雰囲気

1(上)と当日の出発風景(下)



は一度、来村して頂かないと理解してもらえないかもしれませんが。

井戸端会議の延長を

天気村のシステムを紹介します。まず村民に登録します。登録用紙には氏名、住所、TEL、4ケタ数字の好きな番号、そして合言葉、特技、資格を書いてもらいます。4ケタの数字を書くのは、その番号で手作りの手芸品やケーキ、パン、家にあって使わないもの、いらなくなつたものなどを安くバザーに出品したり、リサイクルしたりして貰うためです。今までに畑でとれた野菜で一日宵空市場をしたり、おばあさんが手作りのお手玉を出品され、子供のおもちやとお母さんが買ってかえられたほほえましいやりとりもあります。ここは下町根性の集まりです。から、すごくいいもの、なんていうのはあんまりありません。生活

必需品とか、ちょっとした小物がほとんどです。しかし毎日楽しい高いの場となっています。

そして特技、資格を書いてもらうのは、それをただ特技です、というだけに止めず多くの人に教えてあげてほしいからです。カルチャーセンターだからって、〇〇大学教授だとか格式ばつたものはいいいのです。「あんたこんなことできるの、ちょっとおしえてよ」といった井戸端会議の延長を、天気村で一日教室を開いてほしいだけです。今では多種多様、カラオケ教室(先生は料亭の大将)からリフォーム教室(主婦)などなど、いろいろな人の趣味、特技をなにげなく肩をはらずに教えていただいています。

オープンして八月で四ヶ月。天気村もやっと庶民の場となり、たゞましく泥くさく、とにかく肩をはらずに地に足をつけ、着実に歩んできています。カッコよくなんて思いうからえらんで、こんを風に歩いていると何もかもがほほしく、楽しく、すべてのことに平和な気持ちで接していただける気がします。

つらい時は空見よう

あつそうそう、天気村には「天太」というヤギと、「天助」という犬と、「コカ」と「コトラ」というニワトリがいます。子供達との間でいろいろの出来事がありました。初めは知らんぷりして通っていた子

楽しみながら、体力づくり

むかへ

コカ

毎日午前9から午後3時まで

が、少しずつ気になってきたして、ふれてみたり抱っこしたり……この過程をみて気づいたのは、子供達が自然に『愛する』ということなんです。動物達も子供が大好きなようです。そこには人と動物との一体感があるようです。子供達は自分より小さいもの、弱いもの、劣ったものを世話し、かわいがることによって、『愛される喜び』とは異なっていた『愛する』という新しい経験を味わってくれたように感じます。愛され

ることに愛することのバランスが保たれて、初めて子供は愛情の真の意味を理解できるのではないでしょう。まさに動物とのふれあいに由り、それは大きくいうと自然と人間の中で自分の思いをほとほらせて、経験を積んで得た宝物なのです。自然と人間の中でできるだけ体験し、自分の肌で感じとり、体得できる場となるよう、これからは頑張っていきたいと思えます。申しおくれましたが、どうして「天気村」というネーミングになっ

たか。それはどんなにすごい都会にいても、そしてそこで打ちひしがれるようなつらいことがあった時でも、ふっと空をみあげれば、誰にだって平等に広く青い空がある……ってことです。雨がふって青空がみえなくても（まわりにつらいことがあっても、心がブルーの時でも）よくよく考えてみると、バックには無数のキラキラ輝く星があるということ。一人じゃない。孤独じゃない。声には出さずともみえないだろうけど、きくと応援してくれている人もいるはず

なんだというのを忘れず、つらい時は空—イコール天気村を思い出して頑張っておしまい、と願いをこめてつけたのです。わたしは、人間がすきやいろいろな、人間がおるけどなあみんな一生懸命、生きてるやろ人間は孤独ちゃうでエ人間自身を大事にしたら、相手の人間も大事にすることになるんや

泣き虫も生き生き通うー

「こんべいとう教室」

「見たい、知りたい、なぜ？」
——子供の意欲、行動力、八方に好奇の手を伸ばさずにはいられない幼児の姿を見る時、金平朝の一つ一つの突起のようにどの突起も思い思いの方向に存分に伸びて行ってほしいとの願いを込めて名付けられた、こんべいとう教室。
子供達も二・三・四歳頃になると社会性が芽生え、友達を必要としてきますが、近所に友達が少ない。でも毎日保育園へ行かせるにはまだ少し早いようで心配だ。そして子供にいろいろなあそび、体験をさせてやりたい。又、子育てを話し合える仲間がいたら……こ

寺澤 いく代
(教室保育者)

んな思いをしているお母さん達がおられるに違いない。自身もそんな思いをしながら子育てをしている保育者が二人、そんな場を持つとうと考えて場所探しをして、村長さんと出会い、意気投合してこの教室が始まりました。

遊びを通して伸ばす

季節・行事を取り入れた保育内容（いちご狩り・いもほり等）、家では出来ないあそび（絵具・水あそび等）、手あそび、言葉あそび、紙芝居、うた、昔なつかしいあそび、色紙、お料理、体操、スイミング等。そして幼児教育学者



こんべいとう教室の七夕祭り

モンテッソリーの考案した教具も一部取り入れハサミ、太い縫い針、のり等を使ってする手先のあそび等、体験学習を通して子供達が内に蔵している本来の力を伸ばして行きたいと思っています。動物たち、そしてまわりの緑、

自然もいっぱいあります。初めはお母さんのそばを離れず泣きべそをかいていた子供や、幼稚園になじめずに退園した子供も、今は週一回の月よう日を待ちわび「先生おはよう!!」と生き生きと通ってきてくれます。そして「〇〇ちゃんバイバイ」等、子供同士もいつの間にかうらうらとけています。月に一回、前月の子供の様子や来月の予定等が書かれた、こんべいとうだよりも発行され、また月に一度は保育者とお母さんとの話し合いの場も持たれています。初めは二人からスタートした教室も今では二十一人になり、九月からは二クラスになります。もっともっとこんを給が広がるようにと願っています。